実践報告

コロナ禍における看護教育への挑戦
―臨地実習でしか学べないことは何か―

豊田　久美子*

新型コロナウイルス感染（COVID-19）の拡大の脅威は、2020年度の教育の在り様を一変させた。教室で、演習室で、そして実習施設で、学生と共に学びあう‘あたり前’が消えたのである。当初の（2020年２月～５月まで）の大学での取り組みと運営については、本学紀要第４号で紹介してきたが、本企画ではその後の講義・演習・実習の進め方とその工夫の一片を担当教員によって記述することを試み、次の時代を切り拓く礎となる資料としたい。

当初は、開学時よりICT教育を行ってきた経験と機器を活用して、全学年にタイムラグなく教育を継続することに集中した。すべては、初めての経験であり試行錯誤、悪戦苦闘の取り組みであった。なかでも、大きな壁となったのは臨地実習である。‘臨地’は文字通り、実習施設に臨んでこそ学べる科目であり、その根幹は自らをその場に投げ入れて現場に漂う空気・施設で働くスタッフの動き、とりわけ看護職者の活動に触れつつ、看護の対象となる人々とのかかわりである。つまり、臨床の様相・看護の対象となる人とその家族の理解、何より看護の実際に触れ自らもその渦中に身を置いて看護を試みることである。

その代替を創出することはできない。しかし、‘臨地に行けない’は‘学べない’ではなく、リアリティにより近い学習方法を創出せざるを得ない。学内で学べる事を練り上げて教材化し、臨地とオンラインでつながり、臨地でしか学べないことを焦点化して、臨地の受け入れが可能な限り、たとえ数日であっても臨地での実習を行った。

このプロセスにより、期せずして看護教育において臨地実習の意義とは何なのか、臨地でしか学べないことをあぶりだすことになった。それは、①いつでも、どこでも、だれにでも途切れることなく看護を提供する実際の経験② F. ナイチンゲールのいう‘What It is, and What It is Not’―看護であること・看護でないことを体験し、自らこれが「看護なんだ」と意味づけることができること②こまごまとした実践の中にこそ看護の専門性があることの実感③看護の対象へ心のこもった関心を寄せることではなかろうか。

アイダ・J・オーランドは、「看護の目的、患者のニードを満たすために、患者が求める助けを与えることである。」として、「患者の‘その時・その場’の‘ニード’を看護師自身の活動によって、間接的に充たすという形態をとる。」と述べている。

この‘その時・その場’において患者の反応をキャッチし、ケアしつつその行為の評価を患者の変化に視てとるという瞬間、看護の固有の価値を実感することは、臨地実習でしか学べない。これが、臨地に行けないこと＝学べないことのすべてであろう。

長年、看護学教育における臨地実習は、臨地

*京都看護大学学長

との協働の在り方が問われてきた。このコロナ禍において、その問いを研ぎ澄まさなければならない。そして、コロナ禍が終息したとき、新たな臨地実習教育のページを開くことになろう。